

地域、学校、子どもをつなぐ

不知火小学校舎の2階にある、地域連携室。隣には4年生のクラスが並び、子どもたちの快活な声が響く――。

この部屋の番人は、甲斐高子さん。地域で児童の学びを支える地域学校協働活動で、学校と地域をつなぐ推進員を務めて7年目。親類もいないこの地で、子ども3人を育てる母親でもある。

「夫の仕事で転々としていたんですが、不知火に来て、近所の方やママ友が支えてくれて。そんな温かな地域性が好きで、ここに家を構えました。私も幼い頃から転勤族。夫は今も単身赴任中ですが、子どもたちには、地元をつくりたかったんです。」

活動では、さまざまな場面で地域の人材を学校に招いてきた。

ミシンの授業では、地域の大人が児童の横にいて、見て褒めることで、児童も作業が進む。

教員1人では4時間程かかる内容も、この日は2時間。地域の人や児童にも笑顔が生まれ、先生も「助かった」と喜んでくれた。みんなが幸せになるこの活動を、甲斐さんは自分にとって「天職」だと語る。

コロナ禍で見つけた光

不知火小では、毎月各クラスに1人ずつ、地域の人たちが読み聞かせを行ってきた。しかし、新型コロナウイルスが流行し、たくさんの方が学校に出入りすることは避けなければならぬ時代に。それでも、想像をかき立て豊かな感情を育む読み聞かせはどうしても続けたい取り組みだった。そこで、地域の人たちと協力

宇輝人

vol.65

子どもの「地元」をつくりたい――。

し、読み聞かせの様子を撮影。編集した動画を各クラスで流した。

「できないから終わり」ではなく、できる方法を一緒に考えたいんです。」

不知火中では、職場体験の代わりに、関心ある職業へ生徒が質問状を作成し、電話で回答を依頼。企業だけでなく、不知火中卒で声優の千葉繁さんや元プロ野球選手の吉本亮さんなど、普段の職場体験では触れられない職業の魅力も知れた。甲斐さんたち推進員がさまざまな協力者を集め、コロナ禍の今だからこそできた新たな経験。

子どものための活動

一緒に活動する西本歩美さんは「甲斐さんは、私が踏み出せないところにもガンガン進む、頼れるお姉さん」と話す。いろんな人に声を掛け、何にでも積極的な姿は簡単にはまねできない。それでも甲斐さんにとって

は道半ば。多くの人が事業を理解し、さらなる活用を願う。

「この活動で、地域の人はずいぶん困っているところを補えたら、私たちの意味があるのかなと思います。一番は子どものために何ができるのか。地元じゃないけど、ここをもっと良くしたいという想いは強いですね。」活動は、きつと子どもたちの未来へつながっている。

不知火小2年生と
さつまいものつる返し



電話で職場体験



動画を映し出して読み聞かせ



学校支援の方法を地域で打ち合わせ



地域の人々が参加する田植え



子どもとハイタッチ♪



甲斐 高子 Kai Takako

不知火町在住。昭和55年京都府に生まれ、幼少期は千葉県千葉市、その後船橋市で過ごす。結婚後は夫の転勤で九州内を転々とする。高3、中3、中1の3人の子どもを主に1人で育てながら地域学校協働活動の推進員を担う。今年度から活動を市内全域に広げている。